

2021 年度(令和 3 年度) 大阪暁光高等学校 学校評価

1. めざす学校像

学校法人千代田学園の始まりは、真言宗盛松寺住職の故高橋道雄師が、第二次世界大戦後の荒んだ世相を憂いて、庶民のために学問所を開いた弘法大師空海(774 - 835 年)の偉業に倣い、1950 年に千代田高等学校、附属幼稚園を開設したところに遡る。弘法大師は、身分や貧富にかかわらずなく門戸を広く庶民に開放し、あらゆる思想・学芸を総合的に学ぶことができる私立学校「綜芸種智院」を創設(829 年)し、そこで多くの前途有為な青年を育てようとした。本学園は、この精神を受け継いでいる。

「人間教育」を建学の精神として、若い世代に豊かな人間性を培うとともに、平和で民主的な社会の形成者として必要な知識、教養と、それに基づいた技術を教授することにより、社会や地域を支え、また支えられる人間を育成することを基本的な考え方としている。その具現化として、本校は、社会的共通基盤を担う教育、福祉、医療など対人援助職の分野を指向する若人を輩出する学園づくりを大きな社会的ミッションとしている。本校は、これまで積み上げてきた一人ひとりが自らの人生の主人公として生きる力(主権者教育)の成果を土台としつつ、志や目標を持って入学してきた生徒とその保護者の期待に応えていくための教育の創造に全力で取り組んでいく。

2. 中期的目標

1. 「人間教育」を理念とする普通科の魅力を生み出す教育実践を行う。
  - (1) 普通科の新コースである教育探究コース、幼児教育コースの教育内容を完成させていく。
  - (2) 「わかる授業」「深く考え参加する授業」の実現に向けて授業改革をすすめていく。
  - (3) 特別活動を教育活動にしっかり位置づけ、自治の力を育てていく。
  - (4) 社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめていく。
  - (5) 特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートしていく。
  - (6) 生徒の発達可能性を信じて諦めない指導を続け、退学者を減らしていく。
2. 系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の進路決定をできるようにする。
  - (1) 1 年次は“職業”、2 年次は“学問”をテーマに卒業後のキャリアを考えさせていく。
  - (2) 年間教育活動の中で、進路実現につながる多様なサポートをすすめていく。
  - (3) 併設短大への内部進学希望者を増やす。
3. 基礎的な理論・技術と患者一人ひとりをかけがえのない存在として捉えられる看護師を育成する。
  - (1) 命と向き合う職業に就く者としての自覚と誇りを育てていく。
  - (2) 看護専門科目と普通科目を共に重視し、基礎学力の向上を踏まえていく。
  - (3) 将来、医療現場でチームとして働くことを考え、チームで責任を果たせる力をつけていく。
  - (4) 就職活動、臨地実習、国家試験の受験学習を両立して取り組ませ、国家試験 100%合格をめざす。
4. 高校を支える諸組織や地域との連携を強め、地域社会に貢献する。
5. 部活動を活性化させていく

《学校アンケートについて》

教育活動の現状や問題点を確認・点検し、教育改善のための方策を明らかにする目的で、学校アンケートを 2021 年 11 月に実施した。

アンケートは、【A. そう思う、B. どちらかと言えばそう思う、C. どちらかと言えばそう思わない、D. そう思わない、E. わからない】の 5 択である。下記の%数値は、「A そう思う」「B どちらかと言えばそう思う」を合算したものである。

3. 学校関係者による評価

【実施評価委員会】

委員長 石井雅彦(教育アドバイザー)

評価委員 城向英司(PTA 会長) 葛目巳恵子(同窓会会長) 玉崎和実(地元自治会長) 福井雅英(教育探究コース特別講師) 八田忠敬(監事)

※( )内の数字は(2019 年度→2020 年度→2021 年度)のアンケート結果。(単位は%)

- 1 学校への満足度はおおむね高く、改善している
 

「この学校に入学してよかった」	在校生(65.5→74.5→75.8)	保護者(84.9→86.0→86.9)
-----------------	---------------------	---------------------

・学校への全体としての評価となるこの項目の数値は高く、近年の好調な入学志願者確保の背景となっていると考えられる。一層の向上をめざしたい。
- 2 科・コースの特色ある授業、施設・設備、校内美化への評価が高い
 

「科・コースの特色ある授業が行われている」	在校生(89.5→85.4)	保護者(89.0→87.3)
「施設や設備に満足している」	在校生(68.7→85.2→88.5)	保護者(87.2→86.5→91.9)
「校内の美化が行き届いている」	在校生(56.0→91.3→92.2)	

・人と関わり人の生活・暮らし・教育を支える「対人援助職」の育成を学校づくりの柱としている本校の目標に照らして、高い数値を積極的に評価したい。さらに充実させていく。
- 3 コロナ渦での学校行事・生徒会行事実施が高く評価された
 

「行事は、生徒が楽しく参加できる」	在校生(71.5→77.1→83.0)	保護者(79.1→73.4→81.9)
「文化祭は、視野が広がり仲間とつくりあげる場になっている」	在校生(63.6→66.7→76.7)	

・コロナ渦で大きな制約を受けながらも、生徒の思いや願いをふまえて文化祭やスポーツフェスティバルを実施したことは、生徒・保護者から高く評価されている。
- 4 いじめの実態に改善がみられる
 

「今、私のまわりでいじめを受けている人がいる」	在校生(はい:9.9→1.6)
「今、いじめを受けている」	在校生(はい:3.7→2.2)

・命や人権を尊重した教育(77.5%)、並びに、生徒同士の信頼関係を育むクラス活動や教師と生徒の関係性の中での早期発見などが功を奏していると思われるが、いじめを受けている 2.2%の生徒への対応が必要である。

**5 思考力・表現力を高める授業を進めていきたい**

「わかりやすい授業が展開されている」 在校生(71.6→71.7→73.5)  
 「授業中に深く考えたり、意見を述べたりする機会がある」 在校生(60.1→61.4)

・わかる授業(知識・理解中心)については評価がされているものの、思考力や表現力を深める指導には課題がみられる。問題解決的な学習や探究的な学びを進めていきたい。

**6 授業と休憩のメリハリ、授業規律の指導は、引き続き課題である**

「授業時間と休憩時間のメリハリがある」 在校生(45.0→48.4→53.3)  
 「授業を妨害する行動に先生がしっかり指導している」 在校生(59.5→54.0→60.9)

・改善傾向はみられるものの、この項目は全項目の中で生徒の評価が最も低い。学習規律の確立は多くの生徒が望んでいる。学力向上に不可欠な部分であり、指導を深めたい。

**7 暴力問題やいじめへの指導を改善したい**

「暴力問題やいじめが起きた時に適切な指導が行われている」 在校生(46.3→55.3→55.7)

・生徒の心理的安全性の確保は、学校にとって大切な課題である。事象が発生した場合は、正確な事実確認に基づいた、迅速で組織的な対応に留意したい。

**8 「やればできる」という自信や自ら学ぶ意欲を育てたい**

「この学校に入学して自分もやればできると自信がついてきた」 在校生(64.5→63.5)  
 「この学校に入学して自分から勉強しようという思いが大きくなった」 在校生(65.1→64.9)

・この学校には、他者との比較の中で傷ついたり、自信を無くしたりしている生徒も多い。その生徒なりの「よさ」、「成長」をていねいに見取っていききたい。学びにおける自信の回復と共に、どの生徒にも「居場所」があり、教育活動の「出番」がある学校をつくらせていきたい。  
 ・効果をあげている充実・KG(家庭学習)ノートや放課後学習会への一層の参加促進と合わせて、日々の授業や行事における「学びの振り返り」を大切に、自律的な学びにつなげたい。

**9 保護者は学校のホームページをよく見ている**

「ホームページの内容は十分であり適切な情報が提供されている」 在校生(61.7) 保護者(78.2)  
 「この学校の指導を信頼できる」 保護者(76.9→77.0)

・HPへの評価は、生徒と比べて保護者が16%以上高い。保護者は、毎日更新されている本校のHPをよく見ていると考えられる。学校への信頼を一層高めるためにも、保護者への情報提供を積極的に推進していきたい。

**10 教師が人権感覚を磨き、暴言を一掃する**

「先生の暴言や人権侵害がない」  
 そう思う・どちらかと言えばそう思う 在校生(77.5)  
 そう思わない・どちらかといえばそう思わない 在校生(16.5)

・77.5%の生徒が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えているが、16.5%の生徒は教師の暴言・人権侵害を感じたことがあると回答していることを受け止め、早急に改善していく。

**保護者の自由記述より**

「この学校に入学させてよかったと思うか」についての理由を問う自由記述欄で、おおよそ8割を超える保護者が学校や教師への感謝の気持ちを述べている。「子どもが生き生き学校生活を送っている」「毎日楽しそうに学校のことを語ってくれる」「自ら進んで勉強するようになった」「進路を決めることができた」「子どもに寄り添い丁寧に指導してもらっている」「一人ひとり大切に自信を育ててもらった」等。

一方、改善を求める意見も若干寄せられた。特徴的な要望は3点である。

①保護者への情報提供

「面談が少ない。もっと電話連絡をしてほしい」「月ごとの日程表がほしい」「授業参観をしてほしい」等の要望がある。学級通信の発行や日常的な保護者連絡等、さらなる改善を図る。

②学習規律

「私語などがあった場合、もっとしっかり注意してほしい」等の要望がある。全てのクラスで学習規律を確立できるよう学年コースで方針を持って対応していく。

③進路指導

「1年から進路の相談をしてほしい」等の要望がある。次年度から始まる「総合的な探究の時間」をキャリア教育に積極的に活用していく。

その他、修学旅行の中止の判断、感染症対策、オンライン授業の実施、生活指導のあり方、実習ができていないこと等に対する意見もあった。

**学校評価委員の意見より**

❖ほとんどの項目で上昇しており、在校生・保護者の満足度は高いものと評価します。「人間教育」を基本理念にして一人ひとりに対して丁寧な指導が行われている結果だと思えます。引き続き理念に沿った教育をおこなって頂きたいと思えます。一方SNS上で低評価の書き込みがあり、対応を見誤ると学校全体の評価を下げることになるので適切に対応する必要があると思われまます。

❖全体的に肯定的な評価がされています。これは新型コロナウイルス感染症の拡大により教育活動が制限される中、多忙な教育現場にあつて、日々教職員の方々が生徒一人ひとりを大切にすることをすすめてきたことにあると思えます。また生徒会やクラス活動への評価の高さは、大阪暁光高等学校が、自主的自律的な集団づくりに取り組まれて来た結果だと思えます。このことが意欲的な学習活動に結びつき、集団の中で違いを認め合い、他者を尊重する力の育成に結びついていると思えます。

❖強制的な指導ではなく、生徒自らの気づきを大切にされている所は素晴らしい。その反面、学習に対してメリハリを持たせるには、毅然とした態度でのハッキリとした指示・指導も必要であり、そこはバランスを取る必要性を感じる。生徒アンケート、保護者アンケートからこの点を読み取れる。学習・いじめ・指導の中の軸になるべき項目において低推移のものがあるので、是非とも改善に直結する対策を期待したいと願っている。

**4. 本年度の取り組み 及び 自己評価**

	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価の指標	総括・自己評価
① 普通科の魅力を創出する人間教育の前進	(1)開設4年目の教育探究コースと幼児教育コースの充実を語る。	《教育探究コース》 ・活動的な授業を年20回以上実施 ・調査研究活動を年50時間以上実施 ・プレゼンテーションを年3回以上実施  《幼児教育コース》 ・保育実習を年6回以上実施 ・高短連携授業の充実 ・保育ボランティアを年2回以上実施 ・保育検定の実施	・学校アンケート ・特色あるカリキュラムの実施回数	《教育探究コース》 ・活動的な授業を年80回以上実施、調査研究活動を年200時間以上実施、プレゼンテーションを年55回以上実施。 ・コロナ禍でも感染対策を講じて、フィールドワーク、高野山合宿、楠小学校訪問、大空小学校訪問を実施した。(ニュージーランド研修は実施できなかった)「特色ある授業が行われている」が88.9%とコースに対する満足度は高い。 ・「教育人間探究の時間」において、自己探究・地域探究・教育人間探究を柱に、たくさんの「ヒト・モノ・コト」に出会わせながら「学びを自己との往還」を重ねた。プレゼンテーション等を通して探究的なスキルと表現力を身に付けてきた。 ・高野山大学文学部教育学科と連携した授業をおこなった。  《幼児教育コース》 ・コロナ禍でも子どもと関わる機会を作りたいと、2年生で「夏祭り実習」、3年生で外部園での「保育ボランティア実習」を実施した。「特色ある授業が行われている」が85.4%とコースに対する満足度は高い。 ・子どもに寄り添う「保育者のこころ」と人権思想に裏付けられた子ども観を持つ保育者を育てるために、基礎学力の育成に力を入れ、特別活動に積極的に取り組ませた。

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児教育コーディネーターを招聘し「保育実習演習」や「高短連携授業」の充実を図ることができた。</li> <li>・保育者以外の進路選択をした生徒の幼児教育専門科目(「ピアノ」「高短連携授業」)に対する著しい学習姿勢の後退があった。教育課程の改善を含めて対応していく必要がある。</li> <li>・3年生において保育検定を実施した。成果と課題が見えており、もう1年実施して継続の可否を判断する。</li> </ul>
(2) 「わかる授業」「深く考え参加する授業」の実現に向けて授業改革をすすめる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科会議の定例化と実践交流</li> <li>・公開授業の定例化</li> <li>・夏期校内研究会での教育実践の交流</li> <li>・新教育課程の策定に向け「新教育課程づくり委員会」で議論</li> <li>・ICT教育係の立ち上げ、ICT教育環境整備と実践研究</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校アンケート</li> <li>・生徒からの意見や要望</li> <li>・生徒総会に出された要求</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「わかりやすい授業が展開されている」は73.5%だが、「授業中深く考えたり意見を述べたりする機会がある」は61.4%、「学力がついたと実感できる」は57.5%と高くない。「思考力・判断力・表現力」を育成する授業への一層の転換が求められている。</li> <li>・週1回の教科会議を定例化し、生徒の現状分析と実践交流をおこなうことができた。</li> <li>・ICT教育係を新設し、オンライン授業、オンラインHRの研究をすすめ、先行実践をつくることができた。コロナ禍の学習保障としてオンラインの課題配信をおこなったが、教育実践へのICTの活用は今後の大きな課題である。</li> <li>・公開授業を2回実施。教科の枠を超えてオープンに学び合えた。</li> <li>・8月に「問題行動の背景をさぐる—子どものしんどさを理解し支え方を考える—」をテーマに夏期教育研究会を実施。生徒理解を深めることができた。</li> <li>・2022年度実施の新学習指導要領と学校週5日制に対応する教育課程づくりを進めた。</li> </ul>
(3) 特別活動を教育活動の中にしっかりと位置づけ、自治の力を育む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実行委員会等を組織し、生徒中心に行事を運営</li> <li>・行事や生徒会活動で全校集団づくりを推進</li> <li>・月曜放課後のHR活動活用</li> <li>・家庭学習週間、放課後学習会をクラス活動として展開</li> <li>・生徒会議案書討議の活性化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校アンケート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍で修学旅行を中止せざるを得なかったが、文化祭は生徒実行委員会を組織し「コロナ禍で何ができるか」を相談しながら進めた。野外ステージを設けることで発表機会を保障した。「学ぶ文化祭」で外部講師の講演やフィールドワーク等を実施し、視野を広げることができた。</li> <li>・体育大会をやめないでほしいという強い要求を受け、11月に球技大会と合体させる形で「スポーツフェスティバル」を実施することができた。</li> <li>・「行事は生徒が楽しく参加できるものになっている」が81.9%と、コロナ禍にもかかわらず向上した。</li> <li>・全校集団づくりの一環として縦割り充実ノート学習会を実施。3年生が自信と成長感を持った。</li> <li>・テスト前の放課後学習会を全てのクラスで実施できた。50%を超える生徒が、学習意欲向上のきっかけとしてKG・充実ノート、放課後学習会をあげている。</li> <li>・「家庭学習週間」に約60%以上の生徒が参加することができている。クラス活動として展開する点で課題を残している。</li> <li>・HR活動として位置付けている月曜放課後を十分活用できていないクラスが存在した。</li> <li>・生徒総会において、すべての全クラスが施設設備と授業に対する要求を提出し、要求実現運動に取り組めた。</li> </ul>
(4) 社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の行動の背景を掴みながら指導</li> <li>・遅刻欠席指導での家庭との連携強化</li> <li>・スマホ・マナーについてHRで考えさせて指導</li> <li>・学期始め・定期考査前の頭髪指導</li> <li>・学期に1度の1日玄関指導</li> <li>・生活指導を業務とする常勤講師の雇用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校アンケート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続きコロナ禍で、生徒の精神面や生活基本的生活習慣に大きな影響を与える中、個々の状況をしっかりと掴み支えていく方針を持って指導に臨んだ。</li> <li>・進学総合コースと幼教コースの3年生で、遅刻10名以上のクラスが2桁以上あった。生活の実態調査を踏まえた分析が必要である。</li> <li>・保護者には、日々の連絡と月末ハガキで通知しているが、さらに連絡を密にとっていく必要がある。</li> <li>・頭髪指導は、再登校指導の方針を持ち、保護者の協力も得て違反者に対応してきているが、日常の大幅な減少ということになっていない。</li> <li>・生活指導を主たる業務とする常勤講師の配置しており、毎回の休み時間には共通門に立ち、更衣室の戸締り、各時間の初めに廊下の巡回を行っている。その報告に基づいて次のステップに向けた方針提起が必要な段階になっている。</li> <li>・学校アンケートによると「校則違反や学校生活のルールについて適切に指導がおこなわれている」は61.5%、「暴力問題やいじめが起こった時に適切な指導が行われている」が55.7%とやや低くなっており、学習規律の確立を含め問題が起こった時の毅然とした指導が課題である。</li> <li>・スマホ指導が不十分であった。スマホの取り扱い、マナーについて考えるHRは持つことができなかった。また授業中を含めてSNSへの投稿が外部からの苦情から発覚するケースもあり、SNSについてのルール作りが早急に求められている。</li> <li>・「命や人権を尊重し差別を許さない教育が行われている」は71.5%であり、「必要に大椎応じて保健室やカウンセリングの先生に相談できる」が63.2%となっており、サポートルームの開設と支援教育に力を入れつつある様子が数字からうかがえる。</li> <li>・教師が生徒としっかり対話し、問題行動の背景を掴み、生徒自身の課題と向き合える指導をすすめられるよう、研修を実施していく必要に迫られている。</li> </ul>
(5) 特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学年の構成員で組織された特別支援係会議の週1回の定例化</li> <li>・必要に応じてケース会議を行う。</li> <li>・学級担任と養護教諭、スクールカウンセラーが情報を共有し、適切な指導を行う。</li> <li>・サポートルームを常設する。</li> <li>・スーパーバイザーの招聘</li> <li>・外部機関との連携をはかる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケート結果</li> <li>・会議内容</li> <li>・学習会実施状況</li> <li>・サポートルーム利用状況</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「必要に応じて保健室やカウンセリングの先生に相談ができる」は63.2%、「個別対応指導や相談」(一人ひとりの性格や諸事情に配慮した指導が行われ、悩みがあるときに安心して先生に相談できる)は67.3%である。生徒が安心して過ごすことができる環境を充実させる必要がある。</li> <li>・特別支援コーディネーターの下に週1回のペースで特別支援係会議を行い、支援が必要な生徒の情報を共有した。</li> <li>・適宜ケース会議を持ち、支援が必要な生徒への見方を一致させ指導した。</li> <li>・サポートルームに担当者を配置。教室に居りにくい生徒の学習援助・悩みの相談などを行った。内容については適宜担任に報告し、</li> </ul>

				<p>生徒理解を深めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スーパーバイザーを招聘し、支援が必要な生徒や、専門機関に繋いだ。</li> <li>・特別支援コーディネーターは研修会に参加し、他校のとりくみ状況等に学んだ。</li> </ul>
	(6) 生徒の発達の可能性を信じ、諦めない指導を続け、退学者減らしていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に寄り添う丁寧な指導</li> <li>・保護者との日常的な共同</li> <li>・転退学者率を5%以内</li> <li>・経験の浅い教員をサポート体制</li> </ul>	・転退学数率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専攻科を含む転退学率 3.5%→3.5%、看護専攻科を含まない転退学率 3.4%→3.2%と昨年度とほぼ変化がない。</li> <li>・三者面談では経験の浅い教員をサポートする体制を作った。</li> <li>・10年スパンで見ると転退学者が大きく減少している。「行きたい学校づくり」を目指した改革の成果が現れている。</li> </ul>
② キャリア教育の推進と進路実現	<p>系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の進路決定をできるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年に応じたキャリア教育の推進</li> <li>・基礎学力の向上</li> <li>・生徒全員の進路決定</li> <li>・看護系進学者の個別指導</li> <li>・検定試験での資格取得</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路状況</li> <li>・資格検定者数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「卒業後の進路を考える機会が1年生からつくられている」が62.2%、「進路実現のための学習指導をしてきている」が64.8%、「進路について悩んだ時に安心して先生に相談することができる」が65.9%である。</li> <li>・コロナ禍のため外部の講師や上級学校を招いての校内でのキャリア教育ガイダンスを実施する機会が持てなかった。コロナ禍での1・2年生へのキャリア教育について工夫が求められる。</li> <li>・3年は進路指導部と担任が連携して、きめ細やかな指導をおこなった。進路説明会を4月7月8月の3回実施した。</li> <li>・国数英の教科で進路講習を実施した。参加者は意欲を持って学んだ。</li> <li>・二次募集も含めると22名の希望者全員が就職内定した。就職希望者に対する基礎学力、コミュニケーション能力の育成及び受験に向けての一人ひとりへの個別指導などが課題となっている。</li> <li>・進学総合コースで看護医療系の選択科目を2年生で2単位、3年生で4単位設定。受験先の分析をおこない、一人ひとりに合わせた個人指導を放課後おこない、看護系希望者15名を合格させることができた。</li> <li>・約35名が英検合格。努力が結果として現れ、達成感を持つことができた。</li> </ul>
③ 五年一貫看護科課程の完成	<p>基礎的な理論・技術と患者一人ひとりをかけがえのない存在として捉えられる看護師を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・命と向き合う専門職としての自覚と誇りの育成</li> <li>・高校3年間の基礎学力の向上</li> <li>・臨地実習での指導者・患者からの学びの充実</li> <li>・チーム責任を果たすことができる力の育成</li> <li>・看護専攻科における就職活動、臨地実習と国家試験対策の両立</li> <li>・国家試験合格100%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校アンケート</li> <li>・国家試験合格率</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍にあっても、少しでも臨地実習に行かせることができるようカリキュラムを構成した。生徒たちは臨地で患者や指導者から多くを学ぶことができ「臨地で学びたい」という要求を高めることができた。</li> <li>・3年生は、体育大会や文化祭で全校のリーダー的存在となり、積極的に取り組むことができた。その中で、仲間と協力共同して物事をやり遂げていく喜びを体感し、看護師として大切なチーム力育成につながった。</li> <li>・年末からの国家試験対策に全員が集中でき、1月からは「誰も取り残さない」姿勢で教え合い学び合うことができた。在校生1名が不合格となったが、既卒生は100%の合格で5年間の平均合格率は99%となった。</li> <li>・看護師は情報収集した中身から患者を理解し、どんな看護が必要かを考える力が求められる。しかし、記録が十分に取ることができない上に創造力が乏しいので、1年次より読書量を増やし、幅広い学びを提供していくことが課題である。</li> </ul>
④ 地域との連携	<p>地域の諸組織との連携を強める</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・敬老会の協力を得た看護科「老年看護」実習の実施</li> <li>・地域全育成会、防災訓練、文化行事、美化活動への参加</li> <li>・敬老会への慰問ボランティア</li> <li>・地域中学校の部活大会の開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加回数</li> <li>・参加生徒の声、地域団体からの意見</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍で地域の取り組みが殆ど実施されず、会議への参加にとどまった。</li> </ul>
⑤ 部活動	<p>クラブ員を増やし部活動を活性化させる</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部指導者の招聘</li> <li>・クラブ顧問会議での活動交流</li> <li>・クラブ活動の目標の明確化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラブ活動内容</li> <li>・クラブ顧問会議の活動報告</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サッカー部、バドミントン部、空手部、ダンス部、吹奏楽部、マンガ研究部の6クラブで外部指導者を招聘した。</li> <li>・「顧問の先生やコーチの指導に満足している」が75.0%→69.4%に、「キャプテンや部長中心に生徒が運営できている」が78.5%→71.1%と、評価されつつも共に前年度よりも下がっている。生徒中心のクラブ運営は高校教育におけるクラブ活動の目的そのものに関わるので、しっかりクラブ指導の目標を明確に組んでいく。</li> </ul>